

無想録 二十五 強者

強者は勝ち弱者は滅ぶ。ゆえに常に勝ちつづける人になろうと人はする。体が弱くなり、病におかされるとすぐ死の暗黒が待っている。体も心も強くならなければならぬ。そうして勝利者であらねばならない。

どんな人が真に強いのであり、いかなる人が真に勝ちつづけた人なのであろうか。沈黙して静かに考えないではいられない。われらは真の意味では必ず勝たねばならない。

私の弟妹たちよ。どうか道のために強く生ききつてくれ。信ずる道に進む時には、いかなる力が碍げようと必ず歩みきる強者になってくれ。

大言壮語している人でありながら、「気の毒なほど弱い人だなあ」と思うことがあり、黙して笑っているのに「強い男だなあ」と感嘆することがある。

進むばかりで、退くことや、眼をつぶって深く考えることを忘れると、強くはなれない。猪の真似をしていると、息がきれて、進んだはずで一つ所をくるくるまわつていたり、斃れてしまつたりする。

静かな余裕を持つことを忘れてはいけない。

強いようでも我をおし通したり、怒りや反逆や嫉妬の心でしたことには、真の強味はない。念仏の腹をつくつて頂くこと、金剛不壊の大乗腹が何よりも必要である。

象も強い。獅子も強い。全身全霊、象のように歩みたい。獅子のように進みたい。仏さまの歩みを如象歩といい、仏さまの心の境地を、獅子奮迅三昧といい、仏さまのご説法を獅子吼という。それに通う何ものかを抱いて生きる。

人生に対する根本の信念が確立していないで、時の流れの雑音ぼやしかたによつて動いていたら、真の生活は生まれぬ。ジャーナリズムはその時代の囃方はやしかたである。

私の弟妹よ。聞いて求めねば何もわからない。真理に根ざさないでは、強い生活はない。聞け、求めよ、読めよ！ 考えよ！ 大理想は、ただ教養によつて生まれる。

教養のない勇氣は、猛獣のような勇氣である。大勇は尊ぶべく、小勇は戒むべきである。

しかして強者は必ず勇者である。

己に勝つ者は勇者中の勇者である。

弟よ妹よ、そし兄たる私が、正しいことでないことで、あるいは私の勝手や、利己心から、君たちの歩む道を妨げようとした時には、たとい、私がどんなに哀願しようと、怒ろうと、そのために道をあやまつてはならない。たとい私が餓死するのをよそに見ながらでも、お国のために、人類のためになることなら、知らぬ顔で歩みきつてくれ。

煩惱即菩提とは大乘仏教の提示する第一義諦である。

煩惱は大地の内奥から湧き出でる力であり、菩提は、崇高^{たか}き彼岸から流れて来る平等の生命である。

煩惱は人間を造る力であり、菩提は仏を造る道である。

煩惱と菩提の一体なるところに菩薩が生まれる。そこに真の人格の力が生まれる。

煩惱あるがゆえに人間凡夫の心があり、菩提の智慧あるがゆえに、高き仏の心を知る。

平等にかたよつて、煩惱の声を無視すれば縁覚であり、煩惱の声のみに動けば凡夫である。

声聞縁覚は人生を逃避し、凡夫は人生に執着する。ともに真の力を持つてはいない。

気の毒な女の方である。母一人娘一人の家庭でありながら、母は娘が三十にもなるのに結婚させない。養子もとらないし、嫁にもやらない。芝居や活動にも一度も出さないし、ただ毎日を事務所に通つて月給をとつて、青春は去ろうとする。

母の心もわかるし、娘の心もわかる。

理屈も道理もない凡心のみの母の心、お題目さえ称えていたら、何かしらいつかは奇蹟がわいてくると考えて、娘にも強いている母、結婚させて娘を男にとられるよりはいつそ死んだ方がましだと思ふ心、はつきりわかる。

その母ゆえに、やさしい乙女心が傷つき傷つけられつつ、恩愛の繩にくるくるまきつけられて一足も歩けない娘の、反感、呪い、不安、憂鬱、それでも一口も母にはそむけない弱さ。

絶ち難き恩愛、その暗の心、大地の心だけで生きてゆけば、脚下に横たわるものは、悪道の暗であり、地獄の火炎である。

天上よりの招喚をちらと聞いたがいい。皆が笑つて生きられる世界があるものを。

「救いというのは貴女の考えているのとは違い、その母上と一緒にあることよりも、そつと不幸がわいてきても仏さまのお慈悲がないからではない。『神も仏もないもの

か』その心こそおそるべきであります。私は、私の腹痛を治してもくれないし、黄金を天から降らしてもくれない。ましてやお婿さんを箱から出してもくれない。今日まで貴女の生き方は、ただ母上の上に中心があつて、貴女の上になかった。貴女の生活を貴女の上に奪還しなさい。母上は気の毒な方です。貴女がはつきり仏の心に帰った時、悪人をこそ救う仏の心が頂け、一切を背負つて立ち上がる力が恵まれます。日蓮上人は、よし龍口で斬られたとしても、けつして斬られてはいないので。……一時間、二時間……話しつづける。

「私は全く間違っていました。」そうです。強くなるには、自分の間違いを発見することです。

「み仏の強いお力が、はつきりわかりました。母がいけないのは私がいけなかつたのです。私の心の内に、その金剛の信力をよりはつきり頂いて母とともに救われます。」あなたの顔は輝きにみち、強い足どりで帰つてゆかれる。

仏教には「触光柔軟」という言葉がある。智慧光に触れると柔軟になることである。時に硬直なまがたいのが強く見えるが真の強さではない。

ニッコと微笑している高僧、それに寸分の間があるだろうか。真の力は柔軟の相の中にある。

人を罵つてみたつて、残るものは淋しさだけであろう。

弱者は人の短所や過去を罵つて、自分を高めようとする。

そうした百万言は、五分間の勉強よりも無価値である。

われおよびわが同胞をしてかかる弱さから愚かさから出でしめよ。

強くなるのにはただ鍛えること養うことである。

西園寺公は八十歳に余つてなお、陛下の御下問に答え、一國政治の大御所である。平素常に洋書を読まれるという。八十歳の老人になつて英語を教えたのでは、Bを教える時にはAを忘れ、Cを知ればBがなくなる。若い時から鍛えたことだけ八十歳になつても、すたらない。田舎の老婆などは、七十歳にして老衰、老耄ろうもうして三つ子のようになる。八十歳にして一國の大財布を握っている高橋大蔵大臣を思う時、使わない頭は早く衰える。

二十歳の若年者、三十の老人、四十の老朽、五十のご隠居、薄志弱行、事なかれ主義、無努力、怠惰、無理想、等々の墮落者の末路である。

「先生ご苦勞ですね、薪割で。」

「いや別にお礼には及びません。お飯をおいしゅういただきましたためです。」

汗が流れようが暑かろうが、曇ろうが、晴れようが、満ち満ちた健康体には苦痛ではない。

働いた時だけ食事がおいしい。

人間、苦しみつつ勝ちつつづけてゆく日に、み法の食事も甘味しくいただけ。体と心の健康！ 微笑の日が毎日続く。勝ってよし、負けてよし。生きることこそ無上の喜び。

勝てと言った。だが、真に勝つとは、勝ち負けを超えることだ。

勝敗、盛衰、喜怒、哀楽、等々の一切を超えた彼岸から、またしても招びつつづけて下さる声聞こえる。

ただこの必然の声に生きる。